

## 論文要旨

学位論文題目： 文法化についての共時的・通時的的研究 ―日本語と英語の修飾語の分析―

氏名： 高橋光子

本研究は、日本語と英語の副詞や形容詞における「文法化」の共時的・通時的な諸特性を明らかにすることを目的とする。本論の研究方法は、文献調査によって収集した用例に基づいて分析する実証的な手法を中心とし、その上で、さまざまな語の派生や、歴史的な言語変化である通時的文法化について、認知言語学的に説明する。

文法化には共時的側面と通時的側面がある。共時的変化は第一段階の文法化であり、通時的変化は第二段階の文法化である。第一段階の文法化である共時的文法化には多くの例がある。共時的な文法化の主要な特性は、具体的な内容語から抽象的な機能語が派生することである。通時的な観点からの文法化の研究は、共時的な観点からの研究よりも数が少ない。本研究では、日本語の副詞の「決して」、「重ねて」、「構へて」と英語の副詞の*hardly*について、通時的な観点からの分析を行う。

第2章では、「決して」についての詳細な調査に基づく分析を行い、その共時的・通時的文法化の全容を次のように明らかにした。現代に継承される意味・用法を持つ「決して」は、18世紀初め頃の浮世草子である『八文字屋本全集』の江島其磧の作品に頻出・偏在した。当時、派生元の語である「決す」は「軍記」や「通俗軍記」で使用される一般的な基本語彙であり、「勝負を決す」という軍の文脈で用いられ、緊迫感・命がけ・覚悟などの副義が喚起される語であった。「決して」は、「子供を殺して自分も死ぬ」といった命に関わる場面や、敵対的な場面で多く使用され、そこには「決す」と同様の副義が数多く存在した。「決して」は話者のモダリティを表す副詞で、派生元の語の「決す」から類推した副義を「て形」の上に写像することで、抽象的な意味「軍に臨む武士の気持ちや様子と同じもの」を言語化したものであると考えられる。このような意味・用法を持つ「決して」は後世に継承された。通時的変化が起るためにはその初期条件である共時的変化を経る必要があるため、18世紀初め頃には「決して」は共時的変化を経たと推測できる。

18世紀初め～中頃の「決して」は肯定・否定・語彙的否定表現に生起し、話者の気持ちの強さ・判断の確かさを表し、多くの語彙的意味があった。19世紀にはさまざまな否定表現に生起するようになり、話者の否定的な気持ち・否定的判断・聞き手への禁止命令を表し、発話行為の力を表す語感の中に希薄化した語彙的意味を残していた。現代の新しい用法は「決してそうとは限らないと思うんです」のように部分否定を表し、語彙的意味は漂白化された。

18世紀後半以降に促音が削除された「けして」が現れた。文法化は音韻的・形態的実態を喪失させる方向に進むため、「けして」は「けっして」よりも文法化の進んだ形態である。

19世紀終り頃に連体修飾節に生起する「決して」が現れた。話者の否定的な気持ちを強めるために使われる「決して」は消失し、語彙の意味は漂白化された。各時代の「決して」の用例は、古い意味・用法と新しい意味・用法の共存状態を示している。しかし、言語変化（文法化）の先端部分を繋いで変化の方向性を見ると、文法化は語彙の意味を削減させ、文法的意味・機能を前景化・強化させる単方向的なプロセスであることが分析できた。

第3章では、動詞の「重ねる」から「再び」を意味する副詞の「重ねて」へ、さらに「将来」を意味する副詞の「重ねて」へと文法化したことについて、「イメージ・スキーマ」を使った分析を行う。「イメージ・スキーマ」では、語の抽象化のプロセスや文法化の各段階で保持される抽象的な類似性が明らかに示された。また、文法化は、徐々に具体性を喪失させ、抽象性を増大させる方向に進行することが示された。

第4章と第5章では、日本語と英語の否定副詞の「構へて」と*hardly*についての通時的文法化の特性を明らかにした。通時的文法化によって、音韻的、形態的な言語実体が徐々に喪失する摩耗が起り、語彙の意味は削減され、希薄化した。古い意味は、新しい抽象的な意味としばらくの間、共存し続けた。「構へて」と*hardly*の主な違いは、「構へて」が19世紀に廃用になったのに対し、*hardly*は17世紀に、さらに抽象的な接頭辞としてのカテゴリー的属性を獲得したことである。*Hardly*は、通時的文法化の中で、さらに抽象的な意味・機能を持つ文法的要素へと変化したのである。

第6章では共時的文法化に焦点を当て、次のような多くの例についての分析を行った。名詞から形容詞 (*cat - catty; frost - frosty; book - bookish*など)、動詞から形容詞 (*choose - choosy; strike - striking; cry - crying*など)、動詞から副詞 (追う - 追って、など)、そして、名詞から形容詞 (黒 - どす黒い; 水 - 水くさい、など)。これらの全ての分析において、文法化の元となる語は、一般的な基本語彙であることが明らかになった。それらは具体性が高く、想起されやすいといった特徴を持つ。派生元の語から喚起される主観的な意味が派生語へと写像され、その主観的な意味が派生語の意味となる。派生元の語と派生語とは、メタファー、すなわち、類似性や近接性の関係によって結ばれている。

第7章ではイノベーション、文法化、言語変化の間について議論した。共時的文法化は、個人のイノベーションによって具体的な語から抽象的な語が派生し、その派生語が言語共同体の中で一般化する言語変化である。通時的文法化は、歴史的な言語変化の一種であり、その派生語がより抽象的な意味や文法的機能を獲得する一方で、音声的、形態的、意味的な言語実体は喪失していく言語変化を表すのである。